様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ８ 月 ３０ 日現在

機関番号：３４３０５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2016
課題番号：２５３８１２７９

研究課題名（和文）幼小連携をふまえた音楽教育プログラムの開発

研究課題名（英文）Program development of music education based on cooperation between kindergarten and elementary school

研究代表者
岡林　典子（OKABAYASHI, NORIKO）

京都女子大学・発達教育学部・教授

研究者番号：３０３３１６７２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では幼児期から児童期への発達の連続性を見据えて、幼稚園と小学校をつなぐ音楽活動の可能性を検討し、「動き」と「声・音・音楽」とが関わるような音楽教育のプログラムを開発した。そして、作成したプログラムを幼稚園と小学校で実践した。また、それらの実践を視聴し、同じプログラムを体験することにより、保育士・教員養成課程で学ぶ学生には、表現力の向上と幼小連携などに対する意識の変化が確認された。

研究成果の概要（英文）：In this research, we examined the possibility of musical activities for cooperation between two kindergartens and one elementary school, considering the continuity of growth from early childhood to childhood, and we developed programs of music education. These programs contain “movement” associated with “voice, sound, & music”.
Through the practicing these programs, we could ascertain following two points: 1) It could enrich expressive ability of the students learning in a training course for nursery and school teachers. 2) It could result in a change of the student’s consciousness in the cooperation between kindergarten and elementary school.

研究分野：音楽教育学，音楽科教育

キーワード：幼小連携　プログラム開発　音楽教育　音楽活動　動き

１．研究開始当初の背景

(1)幼児期と児童期をつなぐ音楽教育プログラムの必要性

平成 20 年に告示された「幼稚園教育要領」「小学校学習指導要領」では、いわゆる小 1 プロブレムなどの問題を背景にして、幼児期と児童期の教育が円滑に接続し、一貫性・連続性の確保された教育が行われるべきことが明記された。本研究の申請当時は、幼児教育と小学校教育を系統的に繋ぐ実践の試みがなされつつも、相互に意義のある交流が十分になされているとは言い難い状況にあった。平成 20 年度の文部科学省幼児教育実態調査によると、教育課程の編成について小学校と連携している幼稚園の割合は 34.6%であった。その後は49.3%(平成24年度)、54.8%(平成 26 年度)と増加傾向がみられるが、教育課程の接続が未だ十分ではないことが引き続きの課題とされていた(1)。そのような課題を背景として、音楽教育においても幼児期の活動経験が小学校以降の学習の基盤に繋がるような、子どもの発達や学びの連続性をふまえた音楽活動が求められている。申請者は博士論文において子どものリズミカルな声や言葉と運動動作の関わりを分析し、体の動きと声や音、言葉が密接に関わって音楽的な表現を生みだしていることを示唆した(2)。

そこで、「動き」に注目してみると、幼稚園教育要領の領域「表現」の内容の(1)(4)には、(1)生活の中で様々な音、色、形、手触り、動きなどに気付いたり、感じたりするなどして楽しむ、(4)感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりする、などのように「動き」に関する内容が取り入れられている。一方、学習指導要領にも、〔A表現(1)歌唱活動〕に「低学年では…遊びながら歌う活動や体の動きを伴った活動を効果的に取り入れるとともに…」と述べられている。また、〔(3)音楽づくり〕の活動には音遊びの例として、「気に入った音を見付ける遊び、体の動きに合わせて声や音を出す遊び」というように、「動き」に関わる内容が挙げられている。

このように、「動き」は幼稚園教育の表現活動と小学校教育の音楽科とをつなぐ共通の「キーワード」となり得るものである。また、動きはリズムを内包し、音楽と関わる大事な要素である。そこで、本研究では「動き」に焦点を当て、動きと声・音・音楽とが関わる「幼小をつなぐ音楽教育プログラム」の開発を目指すことに至った。

(2)発達の連続性を理解した質の高い指導者養成の必要性

近年、幼児教育の重要性は以前にも増して認識が高まり、質の高い幼児教育を提供することや、系統性を見通した幼小接続の在り方が求められている。そうした背景をもとに、教育現場と大学等の連携の必要性は強く指摘され、幼児教育を担う教員の研修はもとより、教員養成段階における質の高い指導者としての資質・能力の育成や、指導教材の開発は早急な課題である。

幼稚園や小学校の教育現場では「子ども同士の交流」「保育者と小学校教師の交流」「連携カリキュラムの開発」など多様な実践的取り組みが行われるようになったが、一方で、異なる校種・学校間の文化の違いによって連携や相互理解が必ずしも深められているとはいえない現状もある。さらなる連携、接続の充実のためには、教員養成課程において学生が早い段階から連携について学びの機会を得ることが必要であろう。幼稚園教諭を目指す者は小学校の教育課程に対して、他方、小学校教諭を目指す者は幼稚園の教育課程に対して意識と関心を持ち、それぞれに発達の連続性を理解しておくことが重要である。

そこで、本研究では養成課程で学ぶ学生が、発達の連続性を見据えた指導者として高い資質と能力、表現力を身につけられるように、「動きと声・音・音楽」を中心とした音楽教育のプログラムを基にしてなされる幼稚園と小学校での実践を、指導者養成の授業に活かすことを目指すに至った。

２．研究の目的

上記の背景から、本研究では、幼児期から児童期への発達の連続性を見据えて、「動き」と「声・音・音楽」との関わりを中心とした音楽教育のプログラムを開発することを目的とする。

さらに保育士・教員養成課程で学ぶ学生が、発達の連続性を見据えた指導者としての高い資質と能力、表現力を身につけられるように、開発したプログラムに基づいた幼稚園と小学校での実践を指導者養成に活かすことを目指す。

３．研究の方法

本研究の目的を達成するために、以下の方法を試みる。

①幼稚園、保育所、小学校の教材、童謡集などの資料調査や文献を読み込む
②京都幼稚園と京都女子大学附属小学校、宝塚市立西山幼稚園との研究体制を整え、自然な子どもの様子を観察し、実態調査をする
③申請者らと幼稚園教諭、小学校教諭が共同し、同じ題材を用いて子どもの発達段階を考慮した指導内容を検討する
④検討した指導内容で保育や授業を行い、ＶＴＲに記録する
⑤記録された子どもの様子を DKH 社:行動コーディングシステムを用いて行動分析する
⑥それらのデータをもとに、子どもの音楽的発達に沿った連続性のある音楽教育プログラムを開発し、大学、幼稚園、小学校での実践と検証を繰り返しながら、プロセスを重視してプログラム構成を試みる
⑦研究成果は随時、研究ノートや論文としてまとめるとともに、研究会や学会で発表する

４．研究成果

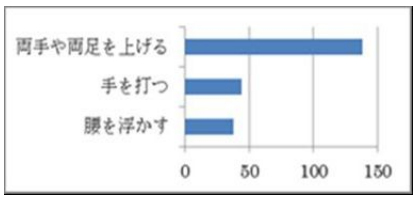
研究成果として､以下の３点が挙げられる。

(1)自然な子どもの観察による実態調査

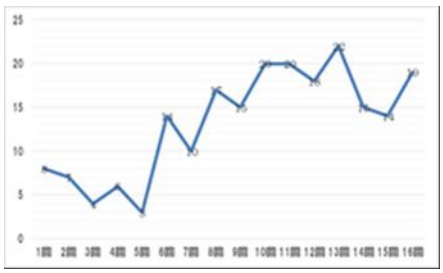
保育と授業の参観では、あるがままの子どもの表現の実態を捉え、幼児と児童の共通性と独自性を見出すように心がけた。そして、幼稚園では多様な場面で子どもの声と動きが音楽的に関わる表現が捉えられた。

一例を挙げると、幼稚園ではフルーツバスケットの遊びの中で、保育者から「な・あ・に」とオニに呼びかける提案がなされたが、連帯感が高まってくると、子どもたちの呼びかけの声が次第に大きくなり、手を打つ、両手・両足を上下させてリズムをとる、などの身体表現がみられた。行動コーディングシステム（DKH 社）を用いた分析からは、かけ声に伴う「両手・両足の動き」は延べ 138 回、「手を打つ」は 44 回、「腰を浮かしてリズムをとる」は 38 回みられ（図 1)、幼児が音声とともに身体全体の動きを用いて表現していることが捉えられた。

また全 16 回のやりとりでの動作の出現数の推移を行動分析ソフトを用いて作成したが、やりとりが定着した６回目以降に動作の出現数が増加していることが捉えられた（図 2)。

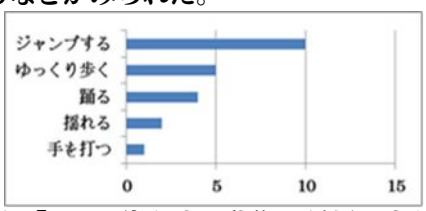


【図１】「なあに」に伴う動作の出現数



【図２】全 16 回における動作の出現数

小学校では、1 年生の音楽科の授業において、子どもの声と動きが音楽的に関わる表現が捉えられた。図３は《ひらいたひらいた》のＣＤ聴取時にみられた児童の動きの種類と頻度である。子どもたちには、ジャンプが多くみられ、次いでゆっくり歩く、踊る、揺れるなどがみられた。



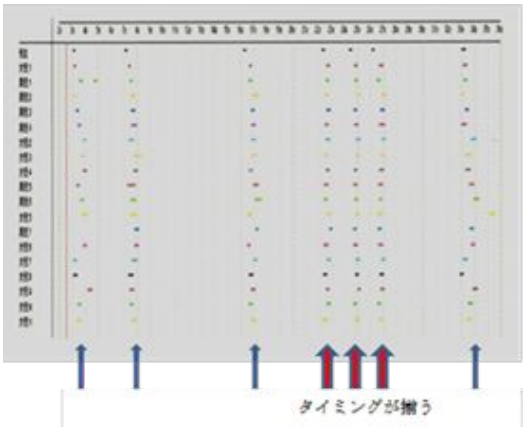
【図３】ＣＤ聴取時の動作の種類と出現数

これらの場面からは、気持ちの高揚に従って子どもたちの声と動作もより大きく豊かに表現されることが明らかになった。

(2)幼小をつなぐ音楽教育プログラムの開発

(1)の調査をもとに、子どもたちの将来にわたる音楽的な素地として、日本語のリズム感や語感に対する豊かな感受性､表現力、創造性を育むことが必要だと感じれらた。そこで、幼稚園では「日本語の語感とリズムを感じて自由に声や言葉で表現したり、音声表現に伴って身体を動かして遊ぶことを楽しむ」､小学校では「日本語の語感とリズムを感じて自由に声や言葉で表現したり、音声表現に伴って身体を動かして遊ぶことを通して、表現力、創造性、即興性、社会性を育む」という実践のねらいを立て、子どもたちの発達段階をふまえて音楽的素地を育むためのプログラム作成に取り組んだ。

先ずは､京都のわらべうた《らかんさん》、《もちつき》《しゅりけんにんじゃ》（わらべうた風に変化した遊び歌）等のわらべうたを題材としたプログラムを作成し、実践を行った。《しゅりけんにんじゃ》では行動コーディングによる分析から、保育者のかけ声に対する子どもの動作のタイミングの変化が捉えられ（図４)、子どもたちがやりとりの繰り返しによってタイミングを感じ取っていく様子が明らかになった。



【図４】7 回のやりとりでの動作の同期性

次に、上記の内容に加え、絵本『だるまさん』『ドオン！』『かぞえうたのほん』『はっけよい畑場所』『ちょんまげとんだ』『がちゃがちゃどんどん』などの絵本を教材として、オノマトペや言葉のリズムなどと動きが音楽的にかかわる音楽教育、表現教育のプログラムを作成し、幼稚園と小学校での実践を行った。実践からは、低年齢児用と考えられている絵本も、工夫の仕方によって幼稚園年長児、小学校低学年の教材として、音楽教育、表現教育に活用できることが明らかになった。

(3)実践事例の活用と学生の意識の変化

作成した音楽教育プログラムの実践を視

聴することや、子どもと同じ題材を体験することが、幼小連携に対する学生の学びや意識の向上にどのように活かされるのかを、大学の演習科目において検証した。その結果、実践事例の活用や同じ題材の体験が、学生に気づきや意識の変化をもたらし、連携に対する理解の深まりを導くことができた。

図 5 の円グラフは、幼小連携に対する意識の変化について、授業後に学生に尋ねた結果である。8 割の学生に意識の変化が認められた。

【図５】学生の授業後の意識の変化

表 1 は授業後に幼小連携に対する意識が変化した理由についてまとめたものである。

【表１】授業後に意識が変化した理由

・以前は小学校教育と幼稚園教育の接続について、それほど重要だとは感じていなかった。しかし、授業を受けてみて双方の指導方法の違いを知り、接続や連携が必要であるという考えに変わった。
・今までは幼小連携についてあまり考えたことがなかったが、授業内容やアンケートなどを通して意識するようになった。また興味が湧いてきて、調べてみたいと思うようになった。
・幼稚園教育と小学校教育の繋がりのイメージを前よりも持つことができたように思う。また、共通している部分もたくさんあるので、良いところを伸ばしていく関わり方をしていくべきだと思った。
・実際の幼稚園と小学校の様子を見て、具体的なイメージを持つことができたし、違いも理解することができた。その上で交流は大切だと思った。

〈註〉
(1) 文部科学省初等中等教育局幼児教育課『平成 20 年度幼児教育実態調査』平成 21 年 3 月/同『平成 24 年度幼児教育実態調査』平成 25 年 3 月/ 同『平成 26 年度幼児教育実態調査』平成 27 年 10 月
(2) 岡林典子『乳幼児の音楽的成長の過程－話し言葉と運動動作の発達との関わりを中心にー』風間書房 2010

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 10 件）
①岡林典子・難波正明・山崎菜央・深澤素子・松田幸恵・藤井香菜子・高橋香佳・大瀧周子「幼小をつなぐ音楽活動の可能性(4)－絵本を用いた「表現遊び」から「音楽づくり」へ－」『京都女子大学発達教育学部紀要』第 13 号 2017 pp.73-83
②佐野仁美・岡林典子・坂井康子「『音楽づくり』へつなげる幼児の表現遊び－絵本を用いた実践をもとに－」『関西楽理研究』XXXⅢ 2016 pp.15-31
③岡林典子・難波正明・砂﨑美由紀・山崎菜央・深澤素子・高橋香佳・大瀧周子「幼小をつなぐ音楽活動の可能性(3)－幼稚園・小学校での実践を教員養成に活かすために－」『京都女子大学発達教育学部紀要』第 12 号 2016 pp.89-98
④南　夏世・岡林典子様式の異なる 2 つの遊び歌からの学び～「初等音楽 3・4」の演習で用いた歌唱教材の比較を中心に～『神戸海星女子学院大学　研究紀要』第 54 号 2015 pp.37-44
⑤岡林典子・難波正明・佐野仁美・坂井康子・南　夏世「幼小の子どもの育ちをつなぐ音楽活動の試み－遊び歌《しゅりけんにんじゃ》の実践をもとに－」『関西楽理研究』XXXⅡ 2015 pp.41-52
⑥坂井康子・志村洋子・山根直人・岡林典子「乳幼児の歌唱様音声の韻律的特徴」『甲南女子大学研究紀要』人間科学編第 51 号 2015 pp. 67-73
⑦難波正明・岡林典子・深澤素子・砂崎美由紀・山崎菜央・高橋香佳・大瀧周子「幼小をつなぐ音楽活動の可能性(2)－わらべうた《らかんさん》の実践から」『京都女子大学発達教育学部紀要』第 11 号 2015 pp.1-10
⑧岡林典子・砂崎美由紀・山崎菜央・深澤素子・難波正明「幼小をつなぐ音楽活動の可能性－京都幼稚園と京都女子大学附属小学校 1 年生の実践をふまえて－」『京都女子大学発達教育学部紀要』 第 10 号 2014 pp.77-86
⑨坂井康子・岡林典子・山根直人・志村洋子「乳幼児の音声表現のリズムと抑揚」『甲南女子大学研究紀要』人間科学編第 49 号

2013 pp.41-48
⑩岡林典子・坂井康子「乳幼児の音声表現における抑揚の多様性－歌唱様音声の末尾の上昇に着目して－」『関西楽理研究』XXX 2013 pp.83-89

〔学会発表〕（計 12 件）
①岡林典子・坂井康子・佐野仁美・上木美佳「子どもの創造力を引き出す教師の表現力」日本保育学会第 70 回大会 2017.5.21 川崎医療福祉大学
②岡林典子、坂井康子「絵本から始まる表現活動の展開(2)」日本乳幼児教育学会第 26 回大会　2016.11.27　神戸女子大学
③坂井康子、岡林典子「絵本から始まる表現活動の展開(1)」日本乳幼児教育学会第 26 回大会　2016.11.27 神戸女子大学
④岡林典子・佐野仁美「子どもの創造性を育む授業－絵本を用いた実践をもとに－」全国大学音楽教育学会第 32 回全国大会《鹿児島大会》2016.8.27　鹿児島女子短期大学
⑤坂井康子、岡林典子「表現活動における教材の活用(2)」日本保育学会第 69 回大会 2016.5.8 東京学芸大学
⑥岡林典子、坂井康子、上木美佳「表現活動における教材の活用(1)」日本保育学会第 69 回大会 2016.5.7　東京学芸大学
⑦坂井康子、岡林典子「わらべうたの実践にみる表現力の育ち」日本乳幼児教育学会第 25 回大会　2015.11.28　昭和女子大学
⑧岡林典子・坂井康子・佐野仁美・南 夏世「幼小連携に対する学生の理解－表現活動の実践に基づく演習をめぐって」全国保育士養成協議会第 54 回研究大会 2015.9.23　ロイトン札幌
⑨岡林典子・佐野仁美「オノマトペと動きによる表現活動に関する考察－絵本を用いた実践をもとに－」日本学校音楽教育実践学会第 20 回全国大会 2015.8.14 大阪成蹊大学
⑩岡林典子・坂井康子・佐野仁美・南 夏世「子どもの表現力の育ちをつなぐ音楽教育プログラムの開発」日本保育学会第 68 回大会 2015.5.10 椙山女学園大学
⑪岡林典子、坂井康子、南夏世、佐野仁美「保育者養成課程の学生が抱いている『わらべうた』のイメージ」全国保育士養成協議会第 53 回研究大会 2014.9.19　ホテルニューオータニ博多
⑫岡林典子　「子どもの表現意欲を育む音楽活動の試み-幼稚園と小学校の実践事例から－」日本学校音楽教育実践学会第 19 回全国大会 2014.8.17 熊本大学

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
岡林　典子（OKABAYASHI NORIKO）
京都女子大学・発達教育学部・教授
研究者番号：30331672

(2)研究分担者
難波　正明（NANNBA MASAAKI）
京都女子大学・発達教育学部・教授
研究者番号： 10278442

坂井　康子（SAKAI YASUKO）
甲南女子大学・人間科学部・教授
研究者番号： 30425102

佐野　仁美（SANO HITOMI）
京都橘大学・発達教育学部・准教授
研究者番号： 10531725

南　夏世（MINAMI KAYO）
神戸海星女子学院大学・現代人間学部・教授
研究者番号：70514248

(4)研究協力者
山崎　菜央（YAMAZAKI NAO）
砂﨑　美由紀（SUNAZAKI MIYUKI）
深澤　素子(FUKAZAWA MOTOKO)
上木　美佳(UEKI MIKA)
松田　幸恵（MATSUDA YUKIE）
藤井　香菜子(FUJII KANAKO)
高橋　香佳(TAKAHASHI KYOUKA)
大瀧　周子(OOTAKI CHIKAKO)
吉岡　愛(YOSHIOKA AI)
安達　多佳子(ADACHI TAKAKO)
木徳　友利恵(KITOKU YURIE)

古塚　聡子(HURUTUKA SATOKO)
三ヶ尻　桂子(MIKAJIRI KEIKO)
山本　由佳梨(YAMAMOTO YUKARI)
浅野　江美(ASANO EMI)
中谷　翔子(NAKATANI SYOUKO)